

昭和五十四年七月二十五日  
 第三種郵便物認可  
 発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三五二号)

# 慈光

第三十卷

第十号

## 次

不滅の大法……………(1)

私の入信経路……………池山榮吉……………(2)

釈迦如来を憶う……………白井成允……………(9)

自照日誌抄……………西元宗助……………(12)

念仏詩抄……………木村無相……………(14)

法味・その折り折り……………花田正夫……………(17)

撮取不捨抄……………石田十九三……………(21)

3831 目  
 ⑤

「もろあし」



# 不滅の大法

維摩經義疏

經というは、法と訓じ、常と訓ず。一機の風習  
聖人の教は、また時移り、俗を易(か)うといえども、先聖後賢、その是非を改むあたわず、故に常と称す  
また物の軌則となる、故に法と称す。

## 聖徳太子憲章 第二條

篤く三宝を敬え、三宝とは仏法僧なり。則ち四生の終歸、万国の極宗なり。いずれの世、いずれの人か、この法を貴ばざらん。人はなほだ悪しき者すくなし、能く教うればこれに従う。それ三宝に歸せずんば、何をもつてか枉(まが)れるを直(ただ)さむ。

## 聖徳太子の常持語

わが大王の告げたまうところは、世間は虚仮なり、唯仏のみこれ真なり。(天寿国マンダラの銘文)

# 私の入信の経路

私自身の信仰の経路はどうであるか?自分の事だから微塵のすきもなく、くわしく語れそうなのですが、実際なかなかそうゆきません。それもそのはず、私達のすることと思うことには、私達自身に知られていない無数の因子がはたらいているからです。まして信仰などという奥深い不思議なたましいの過程は、自分の意識した材料だけで十分な話ができるものではありません。

とりわけ絶対他力の信仰は、私達の意志の力で信ずるのではない、仏力に催うされて信ぜしめられるのですから、そこに私達のはかり知れないことがありますから、なおさらむづかしいわけでありませう。

が、実際―私が現に思っているように―私の四十二の時信仰にはいったものとして、そこに至るまでの経過を省みますと、要するに、自己を見下げ果てた時、絶対に信頼した人の手引で信仰に到達しました。具体的に申しますと、自身の罪悪深重、煩惱熾盛に驚かれて、どうすることも

## 法然聖人の法難の時の詞

この弘通は、人はとどめんとすとも、法さらにとどまるべからず、云々。

## 親鸞聖人の詞

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。

「実」というは、かならずもののみとなるをいう。

われなくも 法はつきまじ 和歌の浦の

あをくさびとの あらんかぎりは

# 池山栄吉

きなかつたとき、親鸞聖人のお言葉にしたがって、念仏が申されるようになったのであります。そのいきさつをあらまし申しましよう。

何はともあれ、私が真宗の家庭に生れたことが、すでに私のはからいを超えた、後年、名実ともに私を真宗の信者にならせる大きな因縁でありました。然し、真宗以外の家庭に生れた人は、入りにくいということではありません。真宗の家に生れながら信のない人が多いように、本来他宗、或は無宗の人が、真宗の信に入る人がすくなくない、かえってその方が徹底し易いこともある位です。ただ余宗の人は真宗のいわれを聞く機会がないのに、真宗に生れた人はその機会が多いのは、恵まれた強味であります。

私の父も母も代々真宗の家に生まれましたが特に母は何かにつけ篤信の傾向がいちじるしかったので、その影響を



うけました。時々母から宗教の話を開かされたり、伴われて法座に出たこともありすが、私を最も強く真宗に引きつけ、離れにくくしたのは、母が重病にかかって、助からないかも知れぬと母自身も思い、はたの者もそう思った時、当時まだ小学生だった私に『私は今度は死ぬかもしれない。死ねばお浄土へ参らして頂く。草葉のかげで待っているから、お前も信心をいただいて後からおいで！』そうではないと親子は一世というから、この世かぎりでもう会うことは出来ない。だから是非信心をいただかねばいけない。でももしそういかなかったら、いいや！私がお浄土から迎いにきてあげるから』と云いきかせました。これが私の心にしみこんで、忘れることができませんでした。大分信仰の道から遠のいていいるな、と気づくと、すぐ思い出されて、立ちもどらされました。

そうしたことで真宗に対するひいきの心が続き、当時、一種の反仏教的傾向が知識階級の一部にあったものですから、内心反感をいだきました、もし友人でもあったら、平生内気な私も、口角泡をとばして論じ合いました。しかし単なるひいきに止まっていました。

ところが二十をすぎた頃から、内省の傾向が深まるにつれて、成程、真宗の教は人生の実際にかにも適切なものなどという感じが、いよいよ広く、力強く根を張るようになって、

横超の境へぬけるにはひまがかかったのであります。

当時、岡山の信仰界の人々は、始めから私を篤信者と思っていました。私の方ではこれに対して、一種くすぐったい感じになりました。永年信仰を求めてきたが、どうやら手に入れたようだ、人もそれを認めていると思うと、何だかいい気持ちになった。けれどどうかすると我ながらこれでもいいのかしらと疑われるばかりでなく、信仰が失われたと思うことさえあると、心苦しくなると、人の期待にそむかない信仰の確立にあせりました。

この時代、私が一人ひそかに困った問題が二つありました。一つは念仏が出ない、と云っていいくらい出にくいこととでありました。つとめて称えようとしたが、人前ではあまりがわるくて、喉まで出かかって、押えてしまうのが例でした。かと云って一人の時でもなかなか出ません。余程思いきらないと出て来ない、苦しまぎれに案じ出した最後の一策が、日頃口癖になっている唱歌にかえて念仏を口癖にしようとしたこともありました。

今一つは、仏陀の存在の問題でした。信仰の筋書き、真宗の教理一般は、もうよく呑みこめている、と思っっているのに、肝腎の仏陀そのものが、或時は疑いなく、或時は無いとしか思われなかったのです。仏様が出たり引込んだり、明るくなったり暗くなったり、まるきり見えなくなっ

って、いつとはなしにひいきの心が転じてあこがれもめるようになりました。そこへ三十前後からの近角君との親交は、信仰的人格を見せられて、その傾向が強まりました。

私が六高の教授として岡山に到着くまでは、当時私の理想とした社会事業の実現について、だんだん失敗の歴史があったのですが、それは私に自己の真相を知るうえに沈痛な内省の資料を供してくれました。

岡山での生活は、私にとっては、東京、大阪のそれに比して、何のことはない市井をのがれて山林に隠れたような清閑な、かつ清貧なものであっただけに、静慮の機会に富んでいました。この両者は私共のあれ狂う心の駒を、信仰の門戸に走らす鞭と拍車とであります。

#### 口信物

私に信仰の門戸をくぐらせずにはおかない段取りは、着々と進んできました。十方世界を照曜する無碍光遍照の明朗なにてらされて、無明沈没の煩惑漸々にとられて」とはこうした過程をいうのでしょうか。しかし「涅槃の真因たる信心の根芽わずかにきざすとき」というところにとどくには、まだ幾春秋を送らねばならなかったのです。

人によると案外すらすらはいれるのに、しぶがきのしぶい私が、うろわかりの煮え切らない状態から、決定の信、

たりするのだから、やりきれたものではなかったです。

仏陀を予想したり、想定したり、その他あるいは宇宙の本体といったようなものとみなしたり、又時として人類の歴史や愛のうちに認めようとしたり、手をかえ品をかえて試みしてみるが、要するにこっちの工夫で作らあげたものは、こっちの心持、猫の眼のように変る心持一つでこわれしてしまう。で、見えると得意、見えなくなると失望、それからまた見たいとあせる憧憬とが走馬灯のように巡回して、常没常流転の歎きをくりかえしました。

こんなところをお百度をふんでいたのと反対に、内省だけは絶えず進んでやまなかったのです。或時、非常に責任感の強い人が、あるきっかけから自分が従来不真面目であったのに気付いて、非常な煩悶におちいり、世間からは軽蔑または非難の眼で見られているように思ひこんで、くよくよとして引込み勝の日暮しをしていたのですが、妙に私を信頼して、胸中の悶々を打明けるのでした。それをきかされると、その人の悩みの種になる材料は、私もすべて持合わせていたので、何のことはないその人は、私の面前に現われて、私自身を責めたてる、私の責任感の具体化、私自身の満身の創痕から流れ出る血にまみれた私自身の影としか思えなくなると、恐しくもあり、なげけなくもあり、



こっちも同じ煩悶に引きずりこまれそうで内心おしげをぶ  
るったことがあります。

こうして自分の真相を深刻に見せつけられる機縁が、あ  
ちらからも、こちらからも、私の身辺に押寄せてきて、と  
うとうどうにもこうにもならない窮地に立たされて、はじ  
めて「大きな蔑視」に突きあたったのであります。

「おまえたちの体験できるものうちで、一番大きいも  
のは何か？それは大きい蔑視の時だ。おまえ達の幸福も、  
理智も、道徳もいやになってしまふ時だ」とニイチエは云  
っているが、それとはすこし趣きは違うが、帰するところ  
は同じ大きな蔑視におちいったのであった。

良心は声をはげしくして私をなじる。「お前の心の動き  
を見つめてごらん！おまえは一体何を思い、何をしている  
か。表面は体のいい賢善精進でつつんでいるが、内には醜  
い虚仮不実が巣くっているではないか。今に始つたことで  
はない、おまえの過去をかえりみるがよい。反省にうとい  
者は俯仰天地に愧じずなど平気で口にするが、この言葉の  
おそろしさを承知しているお前に向つて、その言葉通りの  
態度を注文するのは無理かもしれないが、公に関する問題  
に対して、「公のみ私を忘る」とまでゆかずとも、せめて  
は公を主とし私を従とするところまでは漕ぎつけたいもの  
だ。どうだね、それが請合えるかね。お前のやつた社会事

るようでも、いざ尻尾を押えられる段になるとーというの  
は、一旦改めますとかわした言葉を裏切るような証拠でも  
突きつけられると、すぐ態度を一変して、くどいとばか  
りそらうそぶいて、この老いぼれめ、だまってるいろ、おと  
なしく聞いていりゃつけあがって、など毒々しい口答えを  
する。あまりの仕打に腹が立って、取り押えようとしたつ  
て、力づくではとても駄目、私などはね飛ばされてしま  
う。私の口から云いたくないが、お前を突際に左右するの  
は、良心の私ではなくて、お前の私心だ。試みに目をうし  
ろに向けてごらん。要所要所にありありと私心の跡が見出  
せるではないか。お前は眼を前に向けて遠くを見ている間  
は、私の指図にまかそうと思つているが、実行の一段とな  
ると、にわか私心のささやきに聞いて、私を捨てるの  
だ」

良心はこう云つて長太息したが、やがて語り続けたとき  
は、その面に皮肉な微笑のかげが見えた。「ときにお前  
は名譽が大好きだったね。お前の人生の理想は名譽だとい  
つても過言ではないはずだ。成程名譽もよからう、それに  
値いすることが出来れば。お前の心の態度に一番に求める  
名譽と、両者の間に何の矛盾もないかね。でないに虚名に  
なつてしまふよ」

骨を刺す良心の声に私は驚倒しました。黒闇々の空洞に

業の経営でもそうだ。お前はあれでまさか金銭上の利益を  
得ようとは思わなかつたろうが、あの種の事業の一番槍の  
功名はたしかに求めていたではないか。むしろ功名心が第  
一の動機となつてあの計画が生れたのだとは、今ではお前  
も知つてゐる通りだ。勿論そればかりでない、その後にも  
これに似たことは沢山ある。公に関することさえそうだも  
の、純然たる私事にいたつてはなおさらだ。お前はいつ  
も、お前の利益を中心として、それをおすに便利だとな  
ると、表に何か理屈をつけたり、それもしないで、他を犠  
牲としてきた。何たる利己一点張りの人間だろう。たまに  
は目をつぶつて、反省してみるんだね。もっともそんなこ  
とをすると、とてもじつとして居られなくなって、大不安  
におちこむかもしれないが。

ところでこのごろのお前は、一体何を考え、何を望んで  
いるのだ。お前自身に聞いてみるがよい。お前の内に現に  
働いている動機—それが邪心でないと思えるかい。それが  
正しくないとはお前自身に百も承知じゃないか。だにお前  
前は改めることが出来ない。昨今はどう出来ないのを見越  
してか、改めようともしないではないか！何たるずうずう  
しい態度だ。見るにみかねて私（良心）が口をきいたこと  
も度々であるが、お前の私心は、実をいうと、この私、即  
ちお前の良心よりもはるかに強い。初めは神妙にきいてい

投げこまれたのです。私にとって何より大事な名譽、私の  
人生における唯一究竟のまゝであり、ひまわりにおける日  
輪のように、私の一切を向けさせられる名譽。それに値す  
る資格の絶対的否定、これが私の良心の批判でした。それ  
に対して私は一言もないのです。私の立っている地盤が崩  
れ出して、生活の中心点が失われてしまったのです。

云うまでもなくこの時には信仰は崩れていました。今ま  
で往生極楽をねがう衆生としては信仰。人類社会の一員と  
しては名譽を、生涯のめあてとしてあこがれ、求めて来た  
のが、一つは高峰の花、一つは水中の月、手にはとれない  
ものとなつてしまったのです。

「茫々たる恨みには渡に船を失うがごとし、濛々たる憂  
いには闇に道に迷うがごとし」

にわか盲目になつたと同じこと、どう生きて行つたら  
よいものか、さっぱり見当がつかない。

目的のない生活！それはとてもたえられたものではあり  
ません。千古の淋しきの漂う空虚。もしその空しさが満た  
されるとなら、悪鬼の口にも飛びこむでしょう。自由を奪  
われたのではない、自由はそのままありながら、その持つ  
て行きどころのない無期の精神の牢獄です。いかにものがこ  
うが、もたえようが、どうすることも出来ないのです。



かなしきは あくなき利己の一念を

(石川啄木)

もてあましたる男にありけり  
これが、宿業の重荷を背負うている男の運命です。煩惱にしばられた凡夫のおちこむ必然の陥井です。罪悪を餌食とする大龍は、その底で口を開いて待ちかまえているのです。

すでに名譽が駄目とすると、私は浮世に望みを絶たなければならぬ。それは名残りの惜しいことであるがやむを得ない。社会人としての生命はつきたも同然である。この生き甲斐のない世の中に、唯一つ残されたのは、超人的希望、即ち信仰である。考えてみるに、こんな破目におちいって、息づまる苦しさにあえぐのも、つまりは信仰がないせいで。信仰さえあったなら！

ああ、信仰がほしいものだ！私の望みはこの一点に集中しました。私は息をこらした、じっと思いをひそめた。光の一片をものがすまいと、心の眼を一杯に見張り乍ら。

弥陀観音大勢至 大願の船に乗じてぞ

生死の海にうかびつつ 有情をよほうてのせたもう

この時だったのです。どうしたことか私の念頭にフトあの聖人の告白「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信す

はこれ信樂開発の時尅の極促をあらわし、広大難思の慶心をあらわす」

私は今まで述べてきた私の体験で、この聖人の信巻末の冒頭の文を読ましていただいたと信じております。それは私の四十二のときでありました。世間でいう男の最大の厄年に、前念に命終し、後念に即生する、大悲廻向の大信心を獲させていただけたとは、一入ありがたい次第であります。これと申すのも、ひとえに聖人のお手引きによりましたので、この歎異抄第二章は、私にとっては、私の信仰を確立させて下さった如来の金言であります。

「慶ばしい哉。心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法界に流す」

と聖人が慶ばれましたが、私はこの「心を弘誓の仏地に樹てる」というおもむきを、矢張りこの第二章で、心的事実として味読させていただきました。

この時をもって私の信仰は、流転の数をまぬかれぬ疑情の基礎をはなれて、金輪際ゆるぎのない仏智の地盤に樹てられたのであります。爾来十余の星霜を重ねて、今日にいたるまで、時に多少の濃淡はあっても、本質的には一貫して始終変わるところはありません。かつても余した二問題は、ひとりで解決いたしました。念仏も称えられれば、仏の存否も問題にのぼりません。しかも、前にはただ

るほかに別の子細なきなり」という御文がうかんだのです。その刹那、半ばあわただしく御文を引きよせるように、半ばひしと御文に引きつけられる様に感じながら、私は「心身をあげて——途に御文の中に没入した、と思う間もなく、たちまちある衝動を感じました。そうだ！私も聖人と御一緒に！とうなづいて、心に「親鸞」とあるのを「私」と「よき人」とあるのを「親鸞聖人」と読んだと思つた途端、一声、南無阿彌陀仏と称えたのをきっかけに、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏と、洪水に堤が切れたかのよう、とめどなく、高らかに念仏がほとばしり出たのであります。

そうです、念仏が出たのです。あの言いくかった念仏が出たのです。しかも続けざまによどみなく。生れて初めて念仏が、何の懸念もなくすらすらと称えられたのです。

この間、私はいまだかつてない莊嚴な靈感を覚えました。今までの淋しさ、苦しき、やるせなさ、一声一声の念仏に、ぬぐったようにかき消されるあとから、何ともいえない心強い、頼もしい感じが心の底から湧きあがるをおぼえながら、ははあ、これが信仰というものであったかとはじめて思い知らされました。

「夫れ真実の信樂を案ずるに、信樂に一念あり、一念と

の仏陀であり、如来であったのが、固有名が付き、阿彌陀仏でなくてはおさまらなくなりました。

「唯念仏の衆生をみそなわし、撰取して捨てざれば、阿彌陀と名づけたてまつる」

念仏申さんと思いつころのおこるとき撰取して捨てたまわらないのは、弥陀一仏であります。そのいつくしみをいただいで、その御名を称えまつる、それは自然の理であります。そして自然に念仏申されるのは、如来よりたまわつた信心として、過去・現在・未来の信者を通じて一つでなくてはならないのです。願わくば聖人の仰せにきいて、聖人と同じ信心をいただいで、念仏成仏是れ真宗と、同じ道をたどらせていただきたいものであります。

## ニイチエの言葉

君がたが体験し得るものうちで、一番大きいものは何か。それは大いなる蔑視、見さげはての時だ。

君がたの持った幸福も、理性も、道徳も、すっかりつまらないものになってしまう時だ！

世間一般の信者は、自分を見出す前に神仏を見出したんだ、だからさっぱり駄目なんだ。神仏を見出す前に自分の真相を見出さねばならない。



# 釈迦如来を憶う

白井成允

釈尊が亡くなられてから二千五百五十年に当たると伝えられている。その長い年月にわたって、釈尊は無数の衆生を護り慰さめ救うてくださったし、行く末もきわみなくその御はたらきを続けて下さるのであろう。この釈尊はまことに永遠の仏陀のあらわれであらせられた。私共は誰もみなこの仏徳の中にはぐくまれているのである。

釈尊は、百花咲き競う春の園に生まれいでたもうた。その時、はかりなき光明が天地に輝きわたり、とこやみの国々をも照らしつゝした。又妙なる樂（がく）の音がひびきとどろいて、擧者の耳にも通いとおった。まさに一切の衆生の歡天喜地の一時であった。しかるにこの歡喜のあと僅か七日にして母后マヤ夫人は早くも世を去ってしまった。人生の最大の悲痛の事がおこったのであった。

この悲しみは少年の胸に大きな影響をもった。少年の日に樹の陰に独り居られたとき、頭上に垂れた枝の葉陰に一匹の小虫がほうていたのを、たまたま飛んできた小鳥がた

ちまわくわえて去ってしまった。それを見られて、

「生ある者は何故にこのように互に相食（は）みあわねばならぬのであろうか。何故に他の生命を奪い殺して生きねばならぬのであろうか？」

少年の心に憂いに沈まれたと伝えられる。

ここに、人が己れの生を省みる時に、如何にしてもぶつからずにはおられない問題がひそんでいる。しかもそれは、解くこと難い深い謎である。人は何のために生きねばならぬか、又、如何に生きるべきであるか。人生の理想と歩むべき道を問うこの謎は、ひとたびこれにめざめると、解けるまでは安らぐことは出来ない。

太子が、父王の城内で文武の学芸を修められた時も、城を去り諸方の仙聖に道をたずねられた時も、そして終に独り山林にこもり三昧にふけり苦行を練られた時も、不斷に問い、たずね、求め、あかそうと努められたのも、つまりはただこの問題であったと云えるであろう。

かくて最後に坐したもう 菩提樹下の道場で、むらがりおそう一切の悪魔をことごとく調（ととの）え、伏（まつ）ろ）わしめられて、そうした一切の問題が真実に解決せられて、自覚、覚他のさとりをえられたのである。人間の世界に始めて仏陀（覚者）が現われたもうた。仏陀とはめざまめたる人、覚者の義である。自ら道をさとれる智慧で、他をして御自分と等しい道をさとらしめずにはおられない慈悲をもって働いて下さる完全円満な人格である。こうした仏陀が現われたもうた時、私共人間の世界に、真実の智慧の光明が照りそめ、無明の暗が消え、無碍の道が開かれたのである。

釈迦牟尼が仏と成られた時、御自らの内に醒めたる円（まど）けき覺りに安んじて、「われは世の至尊、われは世の至賢、われは世の至善、」と宣べると共に、また広く世間をみそなわして、「奇なるかな一切の衆生悉く仏性を有す」と叫ばれたと云われる。御自ら覺り頭わされた仏は即ち是れ一切衆生の究竟の理想たると共に、一切の衆生が必ず此の理想を成り得ることを宣べ証（あか）したもうたのである。

仏と成られた後の或る日、仏陀は自ら省みてのたもうた、敬い依るべき所をもたない生は禍である。私は今や覺りによって私に知られた法（道・真理）に依り、之に仕え、

之を敬うて生きよう。そうしてこそ徳を修め、意を専らにし、智慧に到り、解脱に到り、解脱の知見に致ることができるのだ。過去にあらわれたもうた諸仏も、未来にあらわれたもうた諸仏も、皆等しく此の如く、法に依り、法に仕え、法を敬うて生きたもうた云々。是れ仏陀が御自ら円けき覺りに住みたもうた故に、覺りに住み法に歩む者の心を明らかに告げて私共を教え導いて下さる御語である。徳満ち解脱円かなる御自らを以て愈よ自ら不斷に徳を修め解脱を証そうとして曾て休まず歩みたもう。其の御歩みの中に私共一切の衆生を悉く「我れと等しく異なること無き正覚に入れしめよう」と念し励みたもうのである。過去・現在・未来三世の諸仏ひとしく同一の法を覺り、同一に諸仏を念し衆生を念したもうのである。

仏陀は曾て病に臥せる弟子クカリ比丘を訪れてさまざまに慰めたもうた。その問答の中に比丘が世尊にまみえることのできなかつた淋しさを訴えた時、之に答えて、仏の云（のたま）うよう「クカリよ、私に会えないといってそんなに淋しがらずとも宜いよ。クカリよ、この崩れる身体を見て何にしようぞ。クカリよ、法を見る者こそ私を見るのだ、私を見るのは法を見るのだ。クカリよ、何故となれば、法を見ることによりて私を見、私を見ることによりて法を見るからなのだ。」



此の問答は、病に臥せる弟子と之を見舞う師との間に、ごやかな親愛としみじみとした敬虔の情とを以て交わされている長い記録の一節であるが、之を読むと、之に浮び出る仏陀の影の中に、自ら法そのものと一如になってしまっておられる測るべからざる崇（けだか）い徳が、おのずから流れていることが思われる。

「法を見る者は私を見る、私を見る者は法を見る。」こんなにも自身と法そのもの（三世諸仏の覚道）とが一つものになってしまっていることを、何のためらいもなく、淡々として水の流れるように、語り得ることは、驚くべき事である。真に釈迦牟尼は現身（うつつせみ）にして即ち仏の法身（みのりのみ）たるを証し頭（あら）わしたもうた、人法一如の真理を示したもうたのである。

盲（めし）いた比丘が衣を縫うために針に糸を通そうとしていた。仏陀は偶ま／＼これを見、比丘のためにその糸を通してくださった。それが仏陀であられたのに気がついて比丘は驚き恥じ、自分の雑事のために貴い世尊を煩らわせたことをおわび申した、崇い徳に満ちておいでなさる御身に此のような雑事を為していただいて勿体ないと云った。徳に満ちている者でも怠ればその徳が減ってしまう。今、おんみは私に徳を修めさせてくれたのだ、ありがとう。仏陀はこう云って静かに去ってゆかれた。

## 自照日誌抄（四）

この拙文が、皆さまのおん目にとまるのは、さわやかな秋、十月のころでありましょう。でもこの日誌抄を書いている只今は、じつは残暑なおきびしい八月の末、それも、さきほどのテレビのニュースでは三十六度八分の高温を報ぜられている炎熱下でございます。

しかしそれでも、やがて必ず、清涼の風の吹く秋は、自然にくる。ツクツクポーションのなき声は、そのことをしきりに告げています。事実、これをお読みくださるときの皆さまは、その秋風の中に、おありになるのであります。わたし今、そのことを想い、そのなんでもない、いわば当然自然のそのことが、不思議であり、ありがたくもあるのです。当来のお浄土もまたまた、かくの如くあるかと。

○ この暑中に拝見したもので、教えられ耳底に残っているもの。

徳に満ちている者は不断に徳を修める。その修めるのは、火が自ら燃え、水が自ら流れる如くに、ただ徳そのものの自然の動きであろう。三世諸仏の法そのものを覚り証し、法そのものとなっておられる仏陀の動きは、身口意の三業挙げて、始も中も終りも常に善く、随って一切の衆生を縁に應じて迷いの道から救いあげて覚りの道の中に転入せしめたもう。是れ仏法力の自然である。此の自然は、仏陀の覚り証したまえる法そのものの本来の性の動きなのであって、随って一切の衆生、ひとりとして此の自然のはたらきを破りていないものはない。

オウクツマラもダイバダッタもアジャセ王も、善星（ぜんしんしょう）比丘も、罪深く悪重く、愛欲に狂い、名利に燃え、法を誇り道を汚すいかなる衆生も、之に値う者ひとりのこらず救われていったのである。

### 仏陀と終始せよ

ラリーブ・インラート

仏陀は無限の光明を放って衆生を撰取して捨て給わず。故に仏陀を信する者はその光明中に住む。即ち仏陀は吾等と終始したまう。仏陀と終始せよ！仏陀は吾等を見ること父母の愛子におけるが如し。憂き時も、悦ばしき時も忘るるなかれ。仏陀と終始する時、何事か成らざるものあらんや。

## 西元宗助

一は、稲津紀三氏（孝養寺住職）の久し振りの『大信海』に、大経下巻の「われ慈悲をもって哀愍し、特にこの経をとどめて止住すること百歳せん」の百歳とは、聖人の愚禿（ぐと）の（下）の人寿百歳によって思うに、衆生を哀愍し給う如来の大悲は、人寿百歳の凡愚の衆生のあるかぎり、この経をとどめ、この経にあうもの、必ず得度し往生せしめずんばやまぬとの意であるとの意趣を、表現は異なるが稲津氏の述べていられるのは有難い。

二には、百華苑発行の月刊誌『信仰』八月号に、巖教也氏が、浄土は西岸（註・彼岸）にあれども、浄土の門（入口）は東岸（註・娑婆）にあり、の至言を紹介し、讃嘆していられることも有難くいただく。

○ この夏も、招かれるままに、諸処をめぐって、いたるところで親切にしてください。そしてあらためて無慚無愧



の高慢のわが身を照らし給う大悲を念ずることでありました。

またその間にあって、家族と共に、北八ツ丘の一角の縞枯山麓の山小屋に泊して、青麦峠のあたりのお花畑を歩いたこと、殊にお盆に帰って来た孫の蟬取りの相手をしたことなどは、楽しいことでありました。

まず孫と一緒に、お仏壇の前に坐して合掌し、蟬取りとは、まことに殺生な罪の深いことでございますが、なにとぞ、しばらく堪忍してくださいと、頭を深くさげる。そして蟬とり袋のついた竿をもって、近所の下鴨神社の糺（ただす）の森にでかける。

沢山の油蟬がしきりに鳴いている。それを、小学一年生の孫は、昨夏にくらべると、うまくなったもので、目ざとく見つけては、サッと袋をかぶせる。袋の中でバタバタする蟬。それを取り押える孫の動作は、獲物をとらえた狩人のようである。

昨年の夏は、蟬のことでひと騒動があった。孫は、夜になっても、とった蟬を籠から放そうとはしない。孫の母も、若い叔母たちも、そんな殺生（せつしょう）なことは許せない、このときばかりは真剣である。孫は孫で、せっかく捕った蟬、絶対に逃がそうとはしない、必死である。しかし孫の母親が涙声になって、お願い、蟬を放しておや

### 念 仏 詩 抄

#### メクラ一定

和上おおせに  
信を得た者も

メクラ——  
信を獲ぬ者も  
メクラ——

信獲たら  
メアキになると  
思いしに  
メクラ一定と  
和上のおおせ

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

和上 禿頭誠師

り、そのかわり、あしたお爺ちゃんに、また捕って貰いなさいといつて、漸く孫もしぶしぶ納得し、目にいっぱい涙をためながら、蟬を一匹一匹、いかにも別れを惜しむように、そして惜しそうに逃がしたという。

それをその日、夜おそく帰った私は聞かされる。わたしは子どものころは、蟬やとんぼをとったり、川にメダカをすくったりして大きくなった。殊に蟬とりの名人であった。そして殺生な罪業深重の自己を、やがて知らされたのである。

しかし、ことは随分、成長していた。孫は、とった蟬をすぐ調べて、弱っていると思うと籠にいれないで、惜しげもなく逃がしてしまう。またメスの蟬は、お母さん蟬だといつて放してしまう。

○ その孫（穂高といいます）が、森の草かげに、死んだ蟬を見つけて、じっと見つめながら、おじいちゃんもいつかは死ぬのか、いやだなという。それで私、当分、大丈夫だよ、いや穂高がお嫁さんを貰うころまでは生きていようと笑いながら元気な声でいうと、フンといつて馳けだしていった。

その孫たちも帰ってしまった。庭の萩も葉鶏頭も、茂って背が高くなった。十月のころには、その萩の花がこぼれ、葉鶏頭があかあかと燃えてさぞ美しいことでありました。

### 木 村 無 相

#### 南無の機ご成就

和上おおせに

湖北の妙慰いわく  
この心の金輪（こんりん）  
聞いてくれぬと  
いうことの  
はつきり知れる  
まで聞くのじゃ  
と——

この心  
聞く機でないとお見ぬきで  
阿弥陀如来は  
南無の機ご成就



ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

お領解(りょうげ)

和上おおせに

〃京都のとせ女に

お領解を問いしに

なんにもごさいません

なんにもごさいません

しかし

どうでも言わねばならぬ

とあるならば

「ナムアミダブツ」——〃

ナムアミダブツは

如来さまのお呼びかけ

それがそのまま

とせ女のお領解

わたしのお領解

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

常呼びかけ

和上おおせに

〃ナムアミダブツ

今 呼んで下さるる

ナムアミダブツ

又 呼んで下さるる〃

「正覚大音

響流十方」

ナムアミダブツと

常呼びかけ

称えても

称えいでも

常よびかけ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

わが心

和上お歌に

〃鬼を生む

親とてほかに

なかりけり

よくよく聞けば

わが心かな——〃

わが心

鬼の親とは

しらざりき

ただ鬼とのみ

聞いておりました

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

みほとけのお手

和上お歌に

〃みほとけに

ナムアミダブツ

常呼びかけ

和上おおせに

〃ナムアミダブツ

今 呼んで下さるる

ナムアミダブツ

又 呼んで下さるる〃

「正覚大音

響流十方」

ナムアミダブツと

常呼びかけ

称えても

称えいでも

常よびかけ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

わが心

和上お歌に

〃鬼を生む

親とてほかに

なかりけり

よくよく聞けば

わが心かな——〃

わが心

鬼の親とは

しらざりき

ただ鬼とのみ

聞いておりました

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

みほとけのお手

和上お歌に

〃みほとけに





# 法味その折り折り

花田正夫

## 遇うことのかたさ

教行信証の総序に

「あゝ弘誓の強縁は多少にも値(もうあ)い匡(がた)く、真実の淨信は億劫にも獲匡(えがた)し云々」とある。「値う」という字を聖人は「まう・あう」と読んで

いられるが、これは、下の者が上の者にあう場合には「まう」という言葉をつけて「まう・あう」というのが、大體昔の言葉の約束で、この反対に、上の者が下の者にあうときは「まかりあう」といつていたそうである。

又、「かたい」という字が「匡」と書かれてはいるが、難の字との違いは「難の字は易に對するので容易なこと」であるし、「匡」という字は、辭書によると「かたいと読むけれども、本来は、そういうことがない」という意味だといわれる。「値い匡し」ということは、あうことが余程困難というよりも、あうなんどということはありません、ほ

とんど無に近い、不可能なこと、絶対にそういうことはあり得ないのに、仏の御力ひとつで思いもかけずおあいさせていただいたとの思召しによる。(以上金子師述)

さて最近「仏との出会い」というような言葉がしきりに使われるにつれて、どうも私にはしっくりしない言葉と、違和感が増してきたについて、かつて讀んだ以上の金子師の説が思い出されたのである。出会いは、同じ水準にある者同志にはいえるが、相對虚仮の凡夫が、絶対真実の仏陀に出会い出来るなどは云えないことである。そこに「匡」かたい、あり得ぬことであるという字を用いられたのも、ひとえに仏力のおかけによると信知されるからである。こうしたことを愚考している時、桐溪順忍師の書に次の説を見出し、非常に嬉しかった。

○ 宗教は如来と私の出会いであるというが、親鸞聖人が如

来にあわれたのは決して「出会い」ではない。「遇会い」とか「獲会い」というべきものと思われる。それは如来が救いきて下さるのに、私の方からもそれに応じて、両方からの意志によって「出会う」のでなく、全く私としては予期しないのにお会い出来たので、偶然に会えたのです。

この意味で「遇会い」とでも云える。又遠く宿縁をよるこべとある点から考えると、私では偶然に会ったように思うが如来の方では、早くからお育て下さって、逃げられぬようにして、先方につかまされて会ったので「獲会い」と言うべきだと思う。「出会い」とは双方が歩み寄って会うので、「神との出会い」「如来との出会い」等とは不適當なことばと思われる。

一、出会 両方から歩みよって会う

あう三 二、偶会 両方共に会うことを予想しなかつた会い方

一 A 一方は偶然、一方は会うことを予想していた会い方

一 B 一方は会いたいと思わなかつたが、先方につかまされたという会い方

三、獲遇 以上で聖人が、「値う」「遇う」という字に如来におあ

い申す場合には「もう」と振り仮名をつけて下さった御親切がいよいよ身にしむことであつた。

私はここで法然聖人の御流適の地、讃岐の塩飽の地頭の西忍との逸話を思い出される。仏縁あつく西忍は念仏の人となつたが、平素上人の目にその信の不十分な点を見られて、何か不審はないかと注意されたけれど、ありがたいこと、結構なことのみ申上げていた。ところが勅免が下つて、四国から帰えられることになり、上人が乗船されて、「西忍聞くことはないか」と呼びかけられた。その時、はじめて自分の足下をかえりみた時、何処にもたすかるところのないことに気づき、それを上人におたずねした時「法然もまいるところは何処にもない。それは無位無冠の身に宮中に参内することは出来ないのと等しい。それな無位の法然が参内できたのは、上皇からのお招きがあつたからである。云々」との教えをうけて、それからは念仏一つでめでたく往生したと伝えられる。「獲遇い」の具体的例である。

この行に奉(つか)えよ

おなじく総序の文に

「大聖一代の教、この徳海にしくはなし。穢を捨て、淨



をねがい、行に迷い、信に惑い、心くらく、さとりすくなく、悪重く障り多きもの、ことに如来の発道を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、もっぱらこの行に奉え、ただこの信をあがめよ云々」

とある。この中で最近、ことに「もっぱらこの行に奉(つか)え」とある一句に胸うたれる。

「つかえる」とは、向う様の思召にしたがうことで、自分の智慧や才覚をめぐらすことではない。正信偈を造られるについて聖人は、曇鸞大師の『論註』の

「それ菩薩の仏に帰するは、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動静おのれにあらず、出没かならず由(ゆえ)あるがごとし」

を引用されているが、動静、出没わがはからいでない、即ちよく奉えられる、無私の姿を鏡とせられている。

如来は罪業のわれらの苦海に沈んで浮かぶ瀬のないことをことにあわれとみそなはして、凡愚を残らず救いとげようと、選びにえらばれて、あらゆる善の中から名号をえらびとって下さったのである。その如来廻向の選択本願の念仏の不行にもっぱら奉えよとのお勧めである。

それなのに、自力の念仏は、念仏してたすかろうとはかたたり、念仏して心をしずめ、罪を消そうと試みるので、わが手でまかなう念仏、念仏の上に自分が居すわって

いることになる。これというのも、名号のいわれを充分にききひらいていないからである。太陽があらわれると提灯は無用となる、仏の真心、名号のいわれをききひらくとき自力のはからいの提灯はすたるのである。

#### 父母孝養と念仏道

「親鸞は父母の孝養のためにとて念仏一返ももうしたることいまだそうらわず云々」

と歎異抄の五条にある。それについて先々号にも述べたが、この条で中心になるものは

「ただ自力をすていそぎ浄土のさとりをひらきなば」にある。即ち、「煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなることあるべからざる」身としては、これをあわれみたまうて、悪人を成仏せしめんために発起して下さった本願を信じ、如来廻向のお念仏による念仏成仏の外に救われる道はないのである。

しかも凡夫が最もはやく念仏成仏せしめられて、身近かな父母をはじめ、世々生々の父母である一切衆生をたすけとげることが出来るのである。だから、真の孝養父母はまず自分自身が信心決定して、撰取不捨のめぐみによって往生不退の位をいただくことによって完うされる。

出世間の大乗・小乗の善や、世間善の、孝養父母、奉仕師長、慈心不殺も、たとえそれが出来たとしても、浄土への縁にはなるが因とはならない。今や大善大行の本願成就のお念仏の太陽は高く中天に輝いている、何の要あつてか、自力の小善としての提灯を持つ必要があるか。太陽が輝く時提灯は無用となる。

ただし、父母の御命日などの縁によって、平素無常の身を忘れはて、われよしにかかって自身の罪悪をかえりみないで親の恩をも忘れていたき、信心の溝をさらえる最上の時とさせていただくことが大切である。そこに我等ごとき大不孝者をおもらしのない大悲に心垢の洗われることが、そのまま真の孝養父母の道となるのである。

#### お盆に際して

私は真言宗の在家に生れたので、幼い時、祖父が先祖代々の位牌を座敷の床に飾り、向え火、送り火などしているのを見て覚えている。

然し、煩惱を断じて、即身成仏する道はけわしく、不可能と知らされて、やがて往生成仏の道に導き入れられた。

そのように、念仏申しながら、ウラ盆経をひもとく時、目連尊者が開眼して母を見ると、餓鬼道におちて懸倒の苦をうけている。そこで種々の珍味をもって母に供えるが、母が食べようとすると焰になってしまう。そこで目連尊者は積尊のもとに走り、なすべき道を尋ねられると、

「汝一人の力で母を救うことは出来ぬ。諸比丘を供養してその力添えを得よ」

と命じられる。やがてその大供養の中に、母は歓喜して帰り、たすけられるとある。

これを念仏裡に味うと、母を餓鬼道にまでおとしめたのは自分のためであった。ことに懸倒の苦、さかさまにつるされて苦しむのも、我々が転倒の考えから、母をさかさまにしているのである。そうしたことをしながら、珍味を供養してもそれはかえって母を苦しめる種となるばかりである。そこに自分の無力さ、人間の親切の末通らぬことを知り、その非を慚愧しつつ、弥陀、諸仏に帰したてまつる時転倒の世界は転じてくる。そこに自分が母を餓鬼道におとししていたことを懺悔し、母もそのことを心からよこんでくれるのである。

お盆どりが日本の津々浦々におこなわれるが、その根本の精神にたかえらないでは、いたずらなお祭りさわざに終ってしまうであらう。



攝取不捨(一)

石田 十九三

私の生い立ち

私は石川県石川郡蝶屋村鹿島に生まれました。日本海海岸で半農半漁の村でした。字には賢隆寺があって御住職は信仰の厚い方と聞いて居りました。

お寺に法座がありますと私は母のあとを追うてお寺によく行ったものです。或時、布教使が来られたので母と共に寺にまいりました。布教使の方が御讃題をあげられると、一同がナムアマダブツ、ナムアマダブツと称え、説教の区切り区切りにまた称名念仏を申します。すると今まで眠っていた人、アメ玉をしゃぶっていた人も、人々の念仏の声におどろいてナムアマダブツと称えますので、幼い心にもどこが有難いのかと思つたものですから、私はどこが有難いのかとたずねましたら、世話方の同行に、子供に何がわかるか、ときつく叱られましたことがあります。

青年になって『歎異抄』を拝読すると「弥陀の本願には

老少善悪の人をえらばれず」とありますから、私を叱つた人はまだ信心がなかったのでしょう。

私が小学四、五年の頃に、父が病床につき、町からお医者さんが診察に来られ、学校から帰ると町の医院に薬を貰いに行くのが仕事でした。十一月中旬頃でした、午後になって急に天候が悪くなり、家を出る時は冷雨と霰雨とが降り、それに私の地方で云うより上とて、シベリヤ嵐が吹き荒れて来ました。私は外套の上から、ゴザ帽子を着て腰を縄でしめて、村はずれまで行くと、三步進むと一步後退をする強風でした。海を見ると黒雲におおわれ、海は黒く見え所々に波頭がくだけて白く見えるところがあり、海面から教条の竜巻が雲の中に立ちのぼっているのが見えまして。隣りの字につきほっとして、また村はずれに出た時、今迄一人通っていなかったのに、一人の大人が私の数十歩前を行くのを見た時は心強く感じました。そして大人の陰に入って歩けば大分歩きやすくなると思ひ、一生懸命に

歩いてその人の陰に入りました。大人の人は何かブツブツ云っているのを、聞き耳たてると、お念仏とわかりました。私も同称しながら町に入って十字路に出た時、はじめその人が振り返って「誰かと思つたが、石田の弟さんかいな、よく念仏をお称えして居つたな。若衆になつてもお念仏を忘れないで称えなさいよ。私はこちらに用事で来たので別れよう」と云って別れました。その方は村でも有名な信仰者と私も知っておりました。医院で薬を貰ひ、帰る時も、風ははげしく霰雨の降る中を、同じように念仏申しながら歩きました。今度は風が追手を吹き飛ばされぬように、橋を渡る時など気をつけて夕方に家に着きました。母は吹きとばされて河にでも落ちやせんかと心配だつたと申しましたので、白崎の小父さんと一緒だったので念仏申し申し心丈夫だつたと云いますと、善い人と同行してもらつてよかつたよかつたと、よろこんでくれました。

父は私の十四の時に亡くなりました。父がいつも坐る所が歯抜けのように誰も坐らないので、なおさら淋しさが増すばかりでした。亡くなって知る親の恩と申しますが、父は特に兄と私の男の子を心配して亡くなつたと、母に聞かされ、納屋に入って独りでよく泣いたものです。

私の村では秋の収穫が終つた十月末から十一月の中頃までに、報恩講がいとなまれます。十五才の時でした。小松市

の観慶寺が、百戸余りの字に六十軒もの門徒がありますので、一日で各戸の報恩講が済まされず、翌日まで続きますので、一日目の晩には御住職の法話が毎年ありました。私の家の近くでしたのでおまいりしてありますと、御法話の最中に、稲の植付のため早苗をとっていた婦人が、泥足で駆けこんで来まして

「御住職様、日頃のおそだてのお陰様で、只今早苗をとつて居ります時、如来聖人のお慈悲に気づかせてもらいました」

と、涙と共に念仏を称えられ、ありがとうございましたと申されましたので、真宗の信仰の気つきについて大いに教えられました。それから、お念仏を申しておれば一段また一段と如来様に近づけるものと思つておりました。

私の字では満十五才になると元服式の様な式があり、先輩や親が集まって式をいたしました。それから一人前の男子として漁業や、字でやっている仕事につくと一人前の賃金が貰えることになりました。又お寺の役僧さんか、信者の方で物知りな人に報恩講調の正信偈や御和讃を習いますと、お寺の報恩講の時に僧侶の方と共に御内陣で唱和するのが慣例でありました。

私が十六才の夏、漁獵中に台風にあい、三十キロメートルの所から帰る時に、舟に海水が左右から流れこむので、



それを汲み出すので頭をあげることも出来なかった。ようやく海岸近くきました。打ち寄せる波は小山のようでしたので、長いロープをつないだ錨をおろし、寄せてくる大波に乗ってやっと岸に近づきましたが、そこで舟は転覆してしまいました。そこまでは覚えておりましたが、私がついた時は、家の床の中でした。あとできけば舟が転覆した時に波の力で岸に放りあげられたそうです。四人乗りの小さな漁舟でしたが幸に助かりましたが、その時私の字では三人亡くなり、陸地に着けなかった舟は、遠く三國港まで行き助かったと聞きました。

### 郷里を離れる

それ以来漁業がいやになりましたが、なお二年余り、天候の好い日にだけ行き、雨や風の強い日は、母と田に出て働いておりました。そのうちに兄が嫁を貰うと、兄の許可を受けて私は大阪で働こうと家を出ました。

当時は第一次大戦の好景気から一変して職もありませんでした。従兄を頼って行きましたが、仕事がないので、市中をうろろしました。中の島公園や天王寺公園では、失業者が一杯でした。二十日間程たずね歩いてやっと見つけたのは、電柱に張紙をする仕事ですから、従兄が許してく

り集合していましたが、私にわからぬ言葉が多いので困りました。

小頭に連れられて河原町丸太町を下った所で仕事をする事になりました。そこで小頭が、新米そこをこぶて、と云いましたが、何をどうしてよいかわからず、うろろろしている、小頭はツルハシで壁を破って見せました。私の地方ではこわすということでした。何分にも立退く家のことですからこぶつ仕事ばかりで、次の年も続きました。

この年ラジオが初めて売られ、大きなラッパのついたものでした。ある朝のこと清水坂の近くに大きな家があり、そのラジオの避雷針の銅盤を植込む仕事です。手伝の一人が云いますのに、仕事が遅くなると、あそこは清水寺に願をかける人が通る、その人は死ぬる思いで願をかけるのだから、見られたとなると殺されるから明るうちに帰らねばならぬ、との事で行く時から恐ろしい気持ちでした。

現場に行くと、大きな柿の樹の根方を掘ってくれとのことで、仕事を始めましたが、太い樹根が張ってしまって仲々掘れません。夜の十時になってやっと四尺四方の深さ三尺の穴を掘りあげて、二尺平方の避雷針の盤を植込みましたのは午後十一時で、主人の家に帰ったのが十二時頃でした。主人にそのわけを申しますと「田舎者は正直の上に馬鹿がつく」と云われたので、腹が立ちました。黙って下宿

りました。

りません。又沖仲仕の仕事を見つけたが、従兄が言うには、その仕事は一尺程の巾の板を何枚かつぎ、天秤棒で本船や舢（はしけ）から荷物を運ぶ仕事だからお前には出来ない、海におちて死にでもしたらお前のお母さんに申しわけが出来ないと止められました。その頃、南京虫にくわれ首や足がはれて、かゆくて困っていたので、国に帰ると云って十円貸りました。

しかし帰ると小さな田舎の事とて、字の人達のお茶呑み話になるにきまっていますから、京都までの切符を買、京都の七条通りで、職業紹介所を教えられ、そこで抄本と身分証明書を出して待っていると、奥から中川所長が来られ「君の抄本を見て同県人であると知った。出来るだけ君の希望の仕事を見つけてあげよう」と云われました。

私も漁業と農業だけしか仕事を知らないことや、御錢を少ししか持っていないので、明日にでも仕事のできる所をお願いすると、当時、河原町通りに電車が開通するため、道路の拡張工事で、家屋の立退きや、改装が始まっているから、そこへ行ってみなさいと云われました。

早速荒神口通りを下った所の親方の家を訪ねました。紹介所の証明書のおかげで、すぐ仕事を貰いましたが、泊る所が無いと申しますと、親方の仕事をしている馬車屋に連れて行ってくれました。翌日仕事に出掛けると、十人あま

下宿の主人は私共がこぶつた跡の材木を毎日運んで居りましたが、おかみさんは無口な方でしたが、ことばの中に私の田舎のことばが出ますので、聞きますと私の隣村の出とわかりました。それからは、おかあさん／＼と呼ぶようになりました。家は真宗で仏壇もありましたがお参りはせぬ人でした。家の裏庭には熊鷹大神とか申す神様をまつてありましたが、別にそこで初水をそなえるでもないの私は別に信じていませんでした。初水を供え、拍手を打ちました。これも初めは下手な音でしたが、何時の間にかほがらかな音になりました。或時、宿の主人と大工の棟梁と私で、日の出新聞の設立するために夷川に明治初年に造った倉を移転する仕事のこと出かけました。見ると三尺程土台石の上の壁がこぶつて取ってありました。三人で見えておきますと、倉の東側の壁が動きだすように感じましたので私はあぶない！と叫ぶなり倉の土台の所に逃げました。二人は壁の下敷になり、棟梁は半年以上も入院し、下宿の主人は三ヶ月の負傷をしました。下宿の主人は、君は信心深かったから助かったのだ、など云って、自分も初水を供え拍手を打つようになりました。しかし夫婦のいざこざは前と変わらなくなりました。夏の日に大げんかがあり、私と仲裁をしようとしたら火に油をそそぐ結果となり、私も顔や手に傷を負い、シャツはポロポロに破られました。争いの原因が私であると知って、下宿をさがし、北白川に食事も仕事も出来る運送屋に変わりました。



## あとがき

きびしい夏だっただけに、秋の涼風が嬉しいことあります。さて、一道会の例会を、第一と第三日曜に開かせて頂きますが、南隣りの鬼頭康彦さんの御好意により会場を提供して下さいましたので、そちらで開催させて頂いたことになりました。池山先生の忌月は十一月でありますので、一道会が月末にありますので、池山先生の「入信の経路」をいただきます、そこから六七の御年まで、自信のまんまが教入信と伝わったその淵源を改めて読みなおさせて頂きました。

又、御在世中はいつも一道会の始めから終りまでお出席下さった白井先生を思い、先生のお心に生き生きと伝わる積尊の徳光を、先生の「正信偈私解」の中からかけさせて頂きました。

西元さまは、大忙しい中から、執筆して下さいました。自照誌が廃刊になったことを心から惜しまれながら、随時随所に聞きとられた法悦を月々慈光誌にいただけますことは、誌友の皆様と共にありがたいことと喜んでおります。

木村さんの念仏詩は、入院中に送って下

さつたものであります。「私の詩と信仰」で表白された通り、念仏を唯一のいのちといただいての信の旅、そこに思わずもれるつぶやきで、念仏から出、念仏におさまるものであります。

石田十九三さんは、仏縁の深い石川県に生まれ、人生の旅を続けられているうちに弥陀仏の撰取不捨の御ふところに帰えられたのであります。正直に打ち明けられての記録であります。引き続き記載させて頂きます。

私は八月一杯休ませて頂きましたが、本年は原稿の依頼が多く、アツと云う間にすぎりました。そうした生活の中で、親鸞聖人が仏法に向われますお心、如来の教法を仰がれ、その教法に生かされ、はからわられてのお生活を今さらに随喜させて頂きました。御判読下さいますように。

### 京都一道会 御案内

時 十月二十九日(日)午後一時  
所 京都市右京区山田開町、浄住寺  
新バス、京都駅より苦寺終点下車  
新大阪、桂駅乗り換え、上桂下車

### △御案内▽

- 毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館。
- 南区駈上町二の八六。鬼頭氏宅。
- 市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
- 地下鉄、新瑞橋下車。名鉄、呼続下車。
- 又は本笠寺下車、市バス乗りつき。
- 教西寺、法話会。昭和区小椋町二丁目四。
- 毎月二十四日、午前・午後。
- 市バス、御器所通り。又は北山下車。
- 地下鉄、御器所通り下車。
- 蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。(但し日曜を除く)尾西市三条板倉新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)  
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫

電話八三一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番  
郵便番号 四五七